



Title	エペソ書の構成と成立について
Author(s)	木下, 順治; Kinoshita, J
Citation	基督教学, 11, 28-32
Issue Date	1976-07-10
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/46324">https://hdl.handle.net/2115/46324</a>
Type	journal article
File Information	11_28-32.pdf



## エペソ書の構成と

## 成立について

木下 順 治

エペソ人への手紙は、その著者の問題について、最も論争のはげしい文書の一つであるが、この問題を、この手紙の構成とからみ合せてきくって見たい。

エペソ書の著者の問題については、近代大きく二つに分れている。(1)エペソ書の中のパウロ的要素を重視する保守的立場の人々は、パウロ著作説を説える(Abbott, Klijn, Percy, Zahn, Guthrie, Cullmann, Michaelis, Clogg, Westcott, M. Barth, Schille, Synge, R. M. Grant, 山谷省吾)。(2)批判的な人は、パウロの思想や用語、文体と異なる要素を指摘して非パウロ説を支持する(Beare, Masson, Dibelius, Nineham, Käsemann, Barrett, Bornkamm, Conzelmann, Milton, Goodspeed,

Lake, W. L. Knox, Brandon, J. Knox, Cadbury, Fuller, Marxsen, Furnish, Johnstone, Moffatt)。(3)問題のむづかしさに著者は決定しえないと主張する人々もある(Jülicher, Cadbury, McNeil, Williams, Cadwick)。(4)エペソ書の内容を、パウロの原作の部分とパウロ以外の編者の筆になる部分とに分けて理解しようとする人もある(Appel, Albertz, Benoit, Cerfaux, Goguel, Harrison)。(1)と(2)の立場は夫々相当の無理がある。小論は(4)のグループに入る全く新しい試論である。

○

エペソ書に用いられている主語の問題は、これをパウロとの関わりで見ようとすると時大切な要素となる。普通によく注意されているのは、「わたしたち」と「あなたがた」である。「わたしたち」をユダヤ人と解し、「あなたがた」を異邦人と見る人々が多い(Abbott, Foulkes, E. F. Scott, Translator's NT, M. Barth, Koester)。しかしこの理解は二・三で破れる。この「わたしたち」は自分を「生れながら怒りの子」と言っている。この言葉はユダヤ人の伝統から言って異邦人を指す文句である(Wis. 13: 1f)。これを強いてユダヤ人と解することは無理である。二・一の「あなたがた」は明らかに異邦人で

ある。従って二章のはじめは、教会の指導の地位にある異邦人(二・二三の「わたしたち」)が、新しく教会に加わってきた異邦人たち(二・二一の「あなたがた」)に向つてのべていると解さねばならぬ。従つてユダヤ人であるパウロは、この何れの代名詞の中にも含まれていない。

エペソ書が強いパウロの面影を残していることは否めない(例えば、三・二、七—八、四・一、六・二〇—二一等)。そのパウロ的色彩を反映している場所が、「わたし」という一人称単数をもつて述べられていることに注意したい。そしてこの「わたし」でのべられている部分を集めると次の如くなる。

- 一・二—二、一五—一八。<sup>(1)</sup>
- (二・二—二二)<sup>(2)</sup>
- 三・二—九、一三—一九。<sup>(3)</sup>
- 四・二—六、一七—二四。
- 六・二—九—二三。<sup>(4)</sup>

註

- 1 一・一八の *ἐγώ*……*ἐγώ*……は元来写本に根跡のあるように、*καί*……*καί*……であつたと思われる。従つて一九の *καί*……はあとから編者によつて加えられ、一八の *καί* が除かれるようになったと見てよい。故に元来は一八で区切られて

いた。

- 2 この部分には全く「わたし」がなく、一四と一八には「わたしたち」がある。この「わたしたち」は二・三—四のものとは全く異り、ユダヤ人と異邦人とを合せた「わたしたち」である。従つてこの「わたしたち」の中にはパウロが加わっていると見ることが出来る。

- 3 口語訳には三・六に「わたしたち」の文字があるが、これは *συν*——の動詞を意訳したもので、原文には「わたしたち」はない。又五節の *ἀποστόλων* は有力な写本には欠けており、*Nesle* 本は特に一記号を付してこの文字を本文より除こうとしている。故に「聖徒たちと予言者たち」と読む。又この五節は「人の子たち」といった極めて稀な語が出ている点からも *M. Barth* の指摘するように、ある聖歌か信仰告白文よりの引用と見てよいと思う。

- 4 ある写本には六・一〇に *ἀποστόλων* とあるが、これはデイダケーなど教父の文書に現われているがパウロの用法にはない故、パウロのものとするわけにいかない。又五・三二には、口語訳にはあらわれないが、原文には *ἐν τῷ θεῷ λέγω* の句がある。これは前後の関係から見てもパウロのものでない。

他方、この「わたしの章」(以下「I章」と呼ぶ)以外の部分は「わたしたち」を用いている部分(以下「We章」と呼ぶ)に属している。そしてこの部分は、これまでエペソ書に特殊な用語(例えば *ἐν τῷ θεῷ ἐκρουραυλιῶς, διο κέτης, χαριστόω, ἀγάπη καὶ ὁδός*)とか、特殊な語法(同

義語を所有格でないだり、長いセンテンスの文)として指摘されてパウロの論拠とされていたようなものが、殆どこの部分に現われている。更に言えば、悪魔を指すのに *akrotes* と言っている(四・二七、六・一一)。パウロはいつもサタンと言ってこの語は用いない。又I章では「異邦人」の語が五回も現われている(二・一一、三・一、六、八、四・一七)、We章では一回も出てこない。これは筆者が異邦人であるからだと思える。「今(then)」の語は、I章ではいつも前の時代との対照として用いられているが(二・一三、三・五)、We章では現在の悪い時の意味で用いられている(二・二、三・一〇、五・八)。I章では、ユダヤ人と異邦人との区別の壁を破ることに思いが集中しているが(二・一四、一八、三・六、四・三)、We章では、召されたあとの信徒の訓練に力を入れている(二・一〇、四・一三、一五、五・一、一五)。I章では「奥義」とはキリストによって異邦人が神の民になることである(三・三一六、九、六・一九)が、We章では一切のものをキリストにあって一つにする意味、この意味でキリストと教会との一体の秘義が語られている(一・九、五・三三)。又I章では教会の文字はないのに対し、We章では教会が非常に重要なものとして語ら

れている(一・二二—二三、三・一〇、二二、五・二三—三三の間)。又教会の中で教職の制度化に向う傾向もあらわれている(四・一一—一二)。とにかくWe章は、I章とはその用語、思想がはっきりと異っている。従って両者は別個の文書であり、又その著者も異っていると思わざるをえない。従って、筆者はI章の作者はパウロであり、We章の作者はパウロの身辺にいた弟子の一人であると考える。

さてI章をパウロの作となす時、パウロのどの時代のものであるかを定めることが大切である。第一に、エペソ書を書いたのは獄中である。しかしこれはエペソの獄にあった当時とは異り、身辺にあまり頻繁な弟子達の出入がなく、比較的静かな状況であったように思える。第二は、パウロの活動期のような激しく戦闘的な語調がなく、精神的にも至極平静であり、すでにユダヤ人と異邦人との問題は一応解決した時期のように思える。この点で、エペソの獄は勿論、ローマの獄を考えるよりは、むしろカイザリヤの獄を考えるのが最も適切である。当時カイザリヤでは、ローマの軍人コルネリオやその周囲の異邦人信徒とピリポを中心とするユダヤ人信徒とが融和した状況にあり、パウロがその生涯をかけて戦った異邦

人の福音化が見事に実っている実状をその目で見、大きな喜びを感じたこともあったであろうと思われる(一三・一三など)。第三に、テキコはこの度のエルサレム行の同行者であった(行伝二〇・四)。テキコはパウロのこの手紙をエペソの教会にとどけ(六・二二)、更にその近辺の教会にも回状として届けたのであろう。一・二に「エペソ」の句のない写本があるのは、そのためであろう。従つてI章はパウロのカイザリヤ期の末期、獄中で書かれたと見る。

ではWe章の成立を如何に考えるべきであるか。この章は三つに分けられる。

(1) 一・三一—一四 神への讃歌。

(2) 一・一九—二・一〇、三・一〇—二二、二〇—二一。

神の力の働きによってなされる世界の救と栄光の教会。

(3) 四・七—一六、二五—三三、五・一—三三、六・一—

一七、二四。恵の下の生活、家庭訓、この世との闘い。

このWe章の著者は、パウロの思想の中心である信仰義認説をとっている(二・四—八)ことから、パウロの思想を受けた者であることは明らかであると共に、その

奥義観や教会観がパウロよりも一歩その次の時代の中に入っていることは否定できない。コロサイ書の異端にあらわれている *kyriakon* が度々色々な意味で用いられており(一・一〇、二三、四・二三)<sup>(5)</sup>、その他コロサイ書と共通した用語や内容の多いことなどは、このWe章の筆者がパウロのコロサイ書やコロサイの異端思想をよく知っている人物であると思われる。この点でコロサイ書(エペソの獄中の書)を持参したテキコ(コロ四・七)が考えられる。又光とやみ、光の子というようなヨハネ的思想のあることは(四・八一—一四)エペソでヨハネ派の思想にふれた者と推定され、この点でもテキコのアジヤ人であることとの関係が考えられる(行伝二〇・四)。もしこの推測が正しいなら、エペソ書の中のWe章の著者はテキコと考えるのが最もふさわしいと思う。彼はコロサイ書を精読し、それを土台にして学びつつ、洗礼者のため、また信徒の訓練のためにWe章を書いた。テキコはエペソ書のI章をパウロの命でエペソにとどけたあとは、その地方で伝道に従事したであろう。<sup>(6)</sup> 後日彼は自分の書いたものをパウロのI章と組合せて礼拝用にまた信徒訓練用に編集した。<sup>(7)</sup> これが現在のエペソ人への手紙となつたのであると考える。

注

5 *Magoria* の語は I 章の中の三・一九にもある。しかしここでは We 章の中の用法と異り、キリストの愛こそ神のプレーローマであるとの主張であつて、完全にパウロのものである(参照 II コリ五・一四、ロマ五・八、八・三九など)。

6 テキコの動靜を聖書の中に見ると、先ず彼がコロサイ書を持參してコロサイに派遣されている(コロ四・七)、ある所から(多分マケドニアから)エペソに遣わされている(II テセ四・一二)、多分テトス三・一二も同じ派遣をさすものと思う)。又アジアの教会の代表としてエルサレムに同行している(行伝二〇・四)。これらはテキコがエペソ及びアジアの地方と深い關係のあることを示している。高又エウセビオスの教会史によれば、カイザリヤにいたピリポとその四人の娘予言者らがその後コロサイの近くのヒエラポリスに移っている。これはおそらくテキコの斡旋によると推定しても必ずしも的はずれではないであらう。

7 第二コリント人への手紙、ピリピ人への手紙、いずれもいくつかの文書が組合せられている。私のローマ書二文書説によれば、ローマ書もまた礼拝用のため二つの文書の結合されたものと考えられる。従つて第四世紀頃に本文の確定する以前に、最初のパウロの諸手紙が色々として作られた事実を否定するわけにはいかぬと考へる。

## 昭和五十年 度行事報告

○第十四回大会 七月十四日 於、北星学園女子短期大学

理事 会  
総 会

昭和四十九年度行事・会計・会計監査報告を承認

決議事項

一、次期大会は七月十二日(月)、北星学園大学において行なう予定とする。

二、公開講演会は高橋虔氏とシユナイダー氏を講師として招くことの可能性を打診する。

三、『基督教教学』第十一号の編集委員として次の各氏を選出。

浅井正三、宇野光雄、大山綱夫、近野亘、菅沼英一、滝沢武人、土屋博

研究発表会

一、キリスト論

札幌グリーン病院  
ケリスワーカー 荒木関 巧

二、アメリカにおけるヴォランタリズムについて

北星学園  
女子短大 大山綱夫

三、キエルケゴールに於ける「建徳」の概念

酪農学園大 渡部光男

四、大正期における北海道キリスト教史への若干の考察

日本基督教団  
旭川豊岡教会 福島恒雄

○公開講演会

都合により中止となる。